た。最後に植物。グンバイヒルガオはわずか 2 度漂着後発芽したが，どちらも結局は枯死した。テリハボクが 2008，2014，2016 年に漂着した。

II.「和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所に漂着する生物たち」　　久保田 信（和歌山県）

瀬戸臨海実験所は京都大学フィールド科学教育研究センターの付属機関で，90 年以上の歴史を有する。同実験所に 23 年勤務する者として，田辺湾白浜においてほぼ毎日漂着物調査を続けている。（クラゲが専門なので）まず，クラゲについて。大型クラゲの漂着には季節性があり，夏は帆走性のカツオノエボシなど，冬は内湾性のものなどが多い。繁殖時期による季節性があるが，風との対応が明瞭というわけでもない。次に貝類。これまで少なくとも 524 種の漂着を確認しており，北限記録のホシダカラガイ成貝の漂着もあった。そのほか，甲殻類としてツノメガニ（冬季凍死），棘皮動物のコブヒトデモドキ，オニヒトデも漂着する。魚類はオナガウツボはじめ，クマドリやクロハコフグ（成熟できない熱帯魚）など。2011 年冬，魚の大量凍死がみられ，3 週間で 871 個体（84 種）に上った。2011 年の冬の水温は例年より低かったことは確かである。しかし，同じくらいの水温の 2014，15 年には大量凍死は起こらなかった。脊椎動物としては，季節的に漂着するハシボソミズナギドリ，偶発性のマッコウクジラなどの迷入などがみられ